

新年祝賀句会特別号

第一部 当季雑詠の部

第一席

猫とき人に人の目差し春隣り

第二席

乙女とは私のことよ春苺

第三席

柿落葉てんでにマチスピカソ様(やう)

清龍

しろう賞(和代さんから)

風の子や缶けりする子今サツカー

佳作

武蔵野のおもかげ残し鹿をどし

業平

(総評)

豊嗣氏、春近くなると猫まで人に近づくのか。猫の表情が想い浮かぶ。西風氏には参った。一種の引つ掛けだが。清龍氏は柿落葉の美しさを熟知する。

黄雀氏。しろう氏も「缶けり」を詠んだかも知れない。業平氏。会場に着いてすぐの即吟に舌を巻く。

第二部 連歌「殿ヶ谷戸庭園」の巻

1. 乙未(きのとひつじ)殿ヶ谷戸園の初句会

倦鳥

あやめ↓初句会

2. 一輪咲きし武蔵野あやめ らうら

武蔵野のつばき↓武蔵野あやめ

発句と脇を調整してバランスを取った。

3. 寒葵四苦八苦して紅葉亭 河童・慶

4. 座敷の中は連歌の嵐 和代・満紀子・靖

四苦八苦と苦吟近すぎ

↓座敷の中は連歌の嵐

5. 月を見て心の憂さを晴らすなり

まさ・黄雀

晴れにけり↓晴らすなり

6. 天の川には大白鳥あて 晶子・西風

7. 野分過ぎ父の背跳躍んではしやぎけり

史子・業平・信貴

飛びて↓跳んで

8. 澄み切る空のジエト雲 皎峰・豊嗣

9. 悩みなしイスラム避けて旅に出る

浩・清龍

憂ひ↓悩み 5. の憂さとの関係

10. 口説いてみたしイスラム婦人 倦鳥

みるか↓みたし(願望)

11. 胸のうと言ふに言へずに秋の空 らうら

12. 恋文かかへまつしぐらなり 河童・慶

13. 肩寄せて行く道遠し冬の月

和代・満紀子・靖

14. 函館行きのデッキに立てり まさ・黄雀

15. いつ還る北方領土旅はるか 晶子・西風

(語順)

16. 流水に乗りアザラシ帰る

史子・業平・信貴

17. 北国の林檎の花はほころびて 豊嗣・皎峰

18. 春爛漫よ花嫁来たれ 浩・清龍

19. 花吹雪荷物は何も要らないぞ 倦鳥

20. ゆらりゆらりと峠を越えて らうら

21. 目覚むれば輿の中にも春の風 河童・慶

22. 熱きくちづけ思ひを寄せて 満・和・靖

さあてお立ち会い! 「熱きくちづけ」の高潮感を持つて惜しくも時間切れとなりました。続きは来月のお楽しみ。改作でも新作でもどうぞんお寄せ下さい。(倦鳥座長敬白)